

氏 名	渥美 綾子
学 位 の 種 類	博士（看護学）
学 位 記 番 号	第 3 1 号
学位授与年月日	令和 2 年 3 月 1 9 日
学位授与の条件	学位規程第 3 条第 4 項該当
学 位 論 文 題 目	市町村保健師が行う保健推進員への支援に関する自己評価尺度の開発
論 文 審 査 委 員	主査 高橋 和子 副査 塩野 悦子，萩原 潤

論文の要旨

【目的】

市町村保健師（以下、「保健師」）の保健推進員への支援内容を明らかにし、その結果をもとに「保健師が行う保健推進員への支援に関する自己評価尺度」を開発することである。

【方法】

本研究は 2 段階で構成した。第 1 段階の研究では、保健推進員を支援している保健師の保健推進員への具体的な支援について、保健師を対象に半構造的面接を行い、質的帰納的分析により明らかにした。

第 2 段階の研究では、第 1 段階の結果を踏まえ、無記名自記式調査票を作成し、予備調査を実施した。探索的因子分析を行った後、調査票を修正し、本調査を実施し、確証的因子分析を行った。そして、信頼性および妥当性を検討した。対象は保健推進員を設置していると想定される市町村を選定し、同意の得られた市町村の保健師とした。

倫理的配慮として、第 1 段階は宮城大学研究倫理専門委員会の承認（宮城大第 1331 号）、第 2 段階は宮城大学研究倫理専門委員会の承認（宮城大第 304 号）を得て実施した。

【結果】

第 1 段階の研究では、研究協力者 13 名、平均年齢は 47.6 歳、保健師としての平均経験年数は 24.1 年、保健推進員への平均支援年数は 11 年であった。保健師の保健推進員への支援内容として 558 のコード、65 のサブカテゴリー、19 のカテゴリー、4 のコアカテゴリーが抽出された。

第 2 段階の研究では、第 1 段階で明らかになったサブカテゴリーをもとに尺度案を作成し、予備調査を行った。そして、予備調査の結果を踏まえて、本調査を行った。本調査では、「保健推進員の主体性を高める」「活動に対する保健推進員の意欲を高める」「保健推進員の活動環境を整える」「保健師間で保健推進員への支援を改善する」「保健推進員の活動に必要な知識・技術を提供する」「保健推進員とともに活動する」の 6 因子 25 項目が得られた。確証的分析では、CFI=0.850、RMSEA=0.082 であり、適合度を示す値の近似値を示した。また、収束的妥当性の指標である AVE が 6 因子中 3 因子で 0.50 以上であり、CR はすべての因子において 0.70 以上であったため、概ね構成概念妥当性が確認された。さらに、尺度全体の Cronbach の α 係数は 0.921、各下位尺度の Cronbach の α 係数は 0.731～0.860 の範囲であり、信頼性が確認された。

【結論】

考察において、信頼性、妥当性が確認された「保健師が行う保健推進員への支援に関する自己評価尺度」の活用例を示し、保健師が保健推進員への支援力を高めていくために活用しうる尺度であると示唆された。本研究において、保健師の保健推進員への支援の評価指標として活用しうる尺度を開発できた。

キーワード：市町村保健師、保健推進員、支援、自己評価、尺度開発

審査結果の要旨

本学位論文は、市町村保健師の保健推進員への支援内容を明らかにし、その結果をもとに「保健師が行う保健推進員への支援に関する自己評価尺度」を開発することを目的としている。本研究は、2段階で構成され、1段階では、質的帰納的研究による、市町村保健師（以下、保健師）の保健推進員への支援内容の明確化、2段階では、保健師が行う保健推進員に対する支援に関する尺度案の作成と、信頼性、妥当性の検証による自己評価尺度の開発が行われた。

2回の対面審査（令和2年1月14日、1月16日）では、以下の指摘事項がなされた。①対象と研究内容が明確になるよう論文題目を再考すること、②研究背景において本自己評価尺度の開発が必要な理由を明確に記述すること、③文献検討において先行研究を踏まえた本研究の位置づけ、本自己評価尺度の作成の意義を記述すること、④1段階においてインタビューガイドおよび分析結果の真実性・信憑性の確認方法を含め、研究方法を明確に記述すること、⑤1段階の結果および考察において核となるカテゴリーを丁寧に説明し、カテゴリー間の関係性を適切に論じること、⑥2段階の分析において関連性の分析の意図を明確にすること、⑦総合考察で、本自己評価尺度の活用可能性を示した添付資料について、その作成意図、本研究での位置づけを説明すること、⑧本自己評価尺度の必要性、活用の可能性、汎用性、国際的評価について考察すること、⑨対象の代表性および、本研究の強み、弱みを踏まえ、研究の限界について明記した上で、発展可能性を検討すること、⑩論文構成を見直し、論文全体の論旨の一貫性に留意し、推敲を重ねること、などであった。その後、上記について真摯に対応し、修正されたことが確認された。令和2年1月30日の最終試験においても、質疑応答により、本学位論文に関わる十分な知識を有していることが確認された。

本学位論文で開発された尺度は、信頼性・妥当性が確認され、その内容も保健師の実践活動に即したものであり、新規性および独創性を有している。保健師の支援の振り返りに留まらず、地域住民の健康増進への波及効果も期待できる。今後、更に、保健師業務の中での保健推進員の支援の位置づけや重要性、関係職種との協働による支援の可能性、保健師の支援能力向上を促進する職場環境の検討、諸外国での応用等の視点から研究を積み重ねることにより発展性も期待できる。以上のことから本学位論文は、博士（看護学）の学位の授与に値するものであると認めた。